【61】

氏　名（国籍）	柳（ゆ）　水晶（すーじょん）（韓　国）
学位の種類	博　士（文　学）
学位記番号	博　甲　第　4875　号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
審査研究科	人文社会科学研究科
学位論文題目	**帝国と「民族協和」の周辺の人々** **ー文学から見る「満州」の朝鮮人，朝鮮の「満州」ー**

主　査	筑波大学教授	博士（文学）	浜　名　恵　美
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	吉　原　ゆかり
副　査	筑波大学講師	博士（文学）	齋　藤　　一
副　査	筑波大学准教授	博士（文学）	中　根　隆　行

論　文　の　内　容　の　要　旨

1932 年 3 月 1 日から 1945 年 8 月 18 日まで，現在の中国東北地方には「満洲国」があった。本論文の目的は，「満洲国」成立直前から崩壊するまでの期間に，朝鮮，「満洲」，日本で韓国語または日本語で発表された小説テクストに焦点をあわせ，対象となる諸テクストとその時代との関わり方から「満洲」と朝鮮，さらに日本帝国の位相を解明することである。

本論文の構成は以下の通りである。

序章
第 1 章　「満洲」・日本帝国・朝鮮――交差する歴史と文学
第 2 章　韓雪野「合宿所の夜」における「満州」の朝鮮人労働者
　　――二つの「合宿所の夜」における文学の形式と内容
第 3 章　朝鮮が再現した「満洲」
　　――『東亜日報』新聞記事と金東仁「赤い山――ある医師の手記――」
第 4 章　「臣民」と「不逞鮮人」
　　――今村栄治「同行者」に見る民族・移民・帝国
第 5 章　張赫宙「氷解」における大陸開拓小説の両義的解釈
　　――氷解を仲介する朝鮮（コレイ）人物語
第 6 章　「哲」がみた「新京」と東亜新秩序
　　――兪鎭午「新京」における空間の政治学

結章

序章は，「満洲」，「満洲国」等の用語の定義を行い，先行研究を検討した後，日本帝国と中国と朝鮮が交差する接触地帯となった「満洲」を朝鮮出身作家がどのように語り，構築し，発展させたのか，「満洲」は

朝鮮でどのように機能したのかを解明することの意義について論じている。

第 1 章は,「満洲国」成立に関連する政治的過程の確認,「満洲」の複合的状況の検討,「満洲」における朝鮮人移民史の概観，日本帝国中央政府と朝鮮総督府，関東軍の政策の齟齬の中を生きる被植民者・移民者としての朝鮮人の動向の追跡を行っている。その後，そのような日本帝国主義の磁場で生成された，朝鮮出身作家による「満洲小説」の全体的な流れの特徴を確認している。

第 2 章は,「満洲国」成立前のテクストとして，朝鮮の代表的プロレタリア文学者である韓雪野作「合宿所の夜」の日本語テクスト（1927 年）と韓国語テクスト（1928 年）を取り上げ，前者が自然主義文学を模倣した小説であるのに対し，後者は「満洲」の B 市炭鉱の朝鮮人坑夫たちの劣悪な労働環境を告発的に描いているプロレタリア文学となっている意味について考察している。

第 3 章は,「満洲国」の「建国」とほぼ同時期に発表されたテクストとして，韓国語の言文一致体を完成したといわれる金東仁の「赤い山――ある医師の手記――」（1934 年）を取り上げ,「満洲」を調査旅行中の朝鮮人医師が朝鮮人移民開拓村で見たことを手記風に記したこの小説の「赤い山」というモチーフが，朝鮮において 1926 年以後から新聞メディアを中心に形成されつつあった「満洲」言説に由来していることを具体的に解明している。また, 朝鮮で流通する「満洲」言説が「満洲国」成立に繋がる帝国の言説として（再）生産されていくことを明らかにしている。

第 4 章は, 朝鮮人作家でありながら, 日本名を使い,「満洲」で創作活動した今村栄治（本名:張栄治）作「同行者」（1938 年）を取り上げ，満州事変直前，身も心も日本人になろうとする朝鮮人の主人公が日本人の同行者と移動しながら経験するアイデンティティの揺れ，結末で日本帝国の建前と現実の差別からアポリアに直面して命がけで行った選択に注目し，このテクストを国策移民期と満州事変前夜をつなぐものとして位置づけている。

第 5 章は, 日本「内地」の文壇に初めて正式にデビューした植民地出身日本語作家, 張赫宙の国策文学「氷解」（1939 年）を取り上げ，このテクストが「民族協和」という「満洲国」の理想を体現する国策プロパガンダ小説ではあるものの，日本帝国の大陸侵略行為を告発する小説としても解釈可能であるという両義性を明らかにしている。さらに作家が自分のエスニシティを織り込み，テクストに挿入した朝鮮人移民の物語に注目し，この国策文学の標的となる読者について解明している。

第 6 章は，植民地朝鮮・戦後韓国の代表的知識人であった兪鎭午の短編小説「新京」（1942 年，韓国語）を取り上げ，テクストの中の風景描写から「新京」という空間に具現化された「大東亜」の理想を確認し，主人公「哲」が見た矛盾と「満洲」における朝鮮人の立場について考察し，さらに「民族協和」的言説の矛盾と亀裂を「満洲国」と東亜新秩序の空間を通して解消していこうとする姿勢へと発展していく過程を明らかにしている。

結章では，第 1 章から第 6 章までの成果をまとめ，朝鮮出身作家が書いた「満洲」を題材・背景とするテクストを,「国民国家文学の枠組み」からではなく，その政治的・歴史的・文化的な交差性のままに分析する営為の重要性を力説している。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は，韓雪夜・金東仁・今村栄治・張赫宙・兪鎭午による「満洲」を舞台とした小説を対象に，朝鮮人にとって「満洲」とはいかなる場所であったのかを詳細に論じた意欲的な論文である。取り上げられている 5 人の作家は，ともに韓国の近代文学史あるいは日本の植民地文学研究において著名な作家であるとはいえ, 今村栄治と張赫宙を除き,「満洲」という共通のテーマから論じられた研究はあまり見受けられない。また，朝鮮人作家と「満洲」の関係性は，韓国近代文学の研究領域で近年注目されている主題のひとつであり，本

論文の成果は日韓それぞれの学界に寄与すると考えられる。

本論文の各章の内容に関しては，朝鮮人作家にとって「満洲」とは何かという命題を帰納的に見出すのみにとどまらず，他方で，文学史的評価や作風が異なっている 5 人の作家によって描かれたそれぞれの「満洲」像が導出されている点を高く評価することができる。具体的には，韓雪夜の韓国語小説「合宿所の夜」には国籍の異なる労働者の実験的連帯の場所としての「満洲」像が，また張赫宙の日本語小説「氷解」には，いわば帝国日本の多元文化主義的な「民族協和」の文脈から捉え直される朝鮮人にとっての「満洲」像が窺える。このように本論文では，朝鮮人作家による「満洲」の類型的なイメージ形成の経緯と，韓雪夜・金東仁・今村栄治・張赫宙・兪鎭午それぞれの「満洲」像とが，併せて論じられていることが最大の特長である。各章の問題設定はいずれも先鋭であり，新たな洞察を示し，著者の優れた資質を物語っている。とりわけ第 2 章，第 5 章，第 6 章の分析と考察は見事である。

付言すると，付録に収録された韓雪夜「合宿所の夜」と兪鎭午「新京」の日本語訳，および別表「朝鮮人作家の＜満洲小説＞（1924-45）」は，今後の「満洲」文学研究にとって貴重な資料となるものである。

以上のように，本論文は力作であるが，問題がないわけではない。朝鮮の民族主義運動や「満洲」史等の歴史的背景の叙述が詳細である一方で，一部にテクスト分析が有機的に集約されていない点などが見られる。

とはいえ，このような課題への取り組みは著者の今後の研鑽に託するところのものであり，朝鮮人作家にとっての「満洲」とは何かを，テクスト分析とともに多彩な資料を用いて追究した本論文が達成した成果は極めて優れたものであると判断される。

よって，著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。